

- NPO法人ホップ
障害者地域生活支援センター

代表理事 竹田 保

親元を離れ、施設から飛び出し暮らし始めて、もうすぐ40年になる。地域生活では日々、問題を抱え、悩み続けてきた。長い一日の時も、あつという間の時もあり、四苦八苦しなごら過ごしてきた。振り返ればいつの間にか自分も還暦が過ぎ、年金暮らしが見え始める歳となった。

病気治療の関係で、7歳から18歳まで病院で過ごし、親元、入所施設を経て札幌で暮らし始めた。この間、食事、トイレ、入浴など病気により、出来なくなって行く自分を意識して過ごしていたが、とりあえず、一度は年相応の生活をしたという思いが強くなり、施設を飛び出し地域で暮らし、もう少しで40年になる。

何も考えずに勢いで、お金も荷物もなく、生活に必要な最低限の家財道具を用意し、生活を始めたが、ヘルパー、日常生活用具、福祉用具などの障がい福祉サービスについては、何ひとつ知識を持つことなく暮らし始めたため、ベッドも電話もなく、給与が出るたびに、ひとつひとつ買い揃え、ベッドを購入したのは一年以上も過ぎてからだった。

今の時代なら、病院の地域連携室や地域の相談支援専門員などが様々な知識のなかから適したサービスをかいつまんで紹介し、地域移行を円滑に進めて行くのだと思う。誰もが必要なサービスを利用しながら、自分らしい生活をおくれるのだと思う。入所施設、病院生活では実現できなかったことができるようになり、地域との繋がりも生まれて来るのだと思う。

当時の生活を振り返ると、生きるために必要な寝床を確保するためのアパート、エネルギーを確保するための食事、身体に蓄積された老廃物を排出するためのトイレやお風呂。生き抜いていくためには、サラリーマンとして働き、給料を貰うことで精一杯だったが、嫌なこと、つ

らいことも全て自分が選択した生活だと言い聞かせながら一日一日を過ごしていた。

本当にダメなときは、誰かが無理やりでも施設につれ戻しリスタートになるんだろうと、ある意味開き直っていた。施設や病院では三食、暖かいご飯と味噌汁、季節に合わせた惣菜が提供されていたが、地域生活では、水分摂取を控え、食物繊維を控えてトイレ制限を意識して生活した時期もあった。ボランティアがくる時間が近くなると、時計の秒針を見ながら頭のなかでカウントダウンを繰り返すこともあった。

当時は、ヘルパーも平日の昼間数時間しか利用できず、利用するためには仕事を休まなければならなかった。地下鉄、タクシーのバリアフリーもほぼなく、電動車いすどころか手動車いすでさえ乗車拒否容認は常態化していた。

職場でヘルパーを利用することはできず、トイレを我慢すること、通勤確保は仕事以上に辛く感じる日もあった。それなりに経験を積んで、日々過ごしてきたことを自分なりに活かしていきたいと思うようになり、障がい者施設や家族から離れて、地域で単身生活をするための支援活動として、ヘルパー、有償運送などともかかわるようになった。新たな支援メニューとして、大学修学支援事業、重度障害者等就労支援特別事業など制度も拡充されている。希望が拡がりわくわくする。

最近、地域で自立生活をしている障がい者が孤立しているのではないかと、支援や関わり方に改善点があるのではないかと感じることもある。当事者と地域との繋がりがなければ、アパートも施設と変わらなくなるのではないと思う。

施設から地域へと移行しても地域が施設化しているのは残念だ。自分らしく生きていくためにも、最低限の福祉サービスが保障され、独立した生活を送る必要があることは前回も指摘したが、孤立して生活をするのではなく、地域と繋がりを持ちながら自分らしい生活ができるようになることで、地域で生活している実感が生まれると思う。